

第2期第3回生涯学習センター運営協議会

〔日 時〕2014年6月23日（月）10:00～12:00

〔場 所〕町田市生涯学習センター 6階学習室2

〔出席者〕※敬称略

委 員：石川清（会長）、小川久江（副会長）、岩本陽児、押村宙枝、佐合昭浩、辰巳厚子、
富川尚子、西原要四郎、花田英樹、布沢保孝、二見秀太郎、柳沼恵一、吉川雅子
以上 13名

事務局：稲田センター長、外川担当課長、松田事業係長、齋藤担当係長、
村田担当係長、小林主任、中村主事（記録）

〔欠席者〕菅谷万里子

〔傍聴人〕1人

〔資 料〕・第3回生涯学習センター運営協議会レジュメ

- ・第2期町田市生涯学習センター運営協議会 日程（案）
- ・2014年度生涯学習センター事業一覧
- ・2014年度生涯学習センター事業 企画書兼事業評価シート 資料3～資料20
- ・第3回町田市生涯学習センター運営協議会 事前提出意見
- ・109町田・生涯学習センター共催講座「ササッと今夜は浴衣美人！みんなで夏の着付け講座」
- ・2013年度生涯学習センター事業 企画書兼事業評価シート 報告1～報告10
- ・平成26年度東京都公民館連絡協議会委員会 第1回研修会の御案内
- ・2013年度講師派遣台帳

- 生涯学習センター運営協議会委員 委嘱伝達式
→ 稲田センター長から花田委員に委嘱状を授与。

<協議事項>

1、2014年度生涯学習センター事業の企画について

（1）まちだ市民大学HATS後期講座

①こころとからだの健康学

事務局：市民大学についてはことぶき大学との違いを出すために、60歳未満の方に優先的に参加していただくと考えている。後期の「こころとからだの健康学」ではウォーキング等の実践的なことも含めて取り組んでいく。

②福祉

事務局：「安心して、ともに暮らす地域・仲間づくり」に繋がるように、実践的なことも含めて行っていく。

③郷土史

事務局：郷土史講座については、通史を年間を通じて学んでいる。後期は明治から現代の町田市について学ぶ。

④国際学

事務局：昨年度までは前期と後期に分けて行っていたが、2014年度は新たに法学というジャンルを取り入れ、年1回のみの講座とし、今回は「グローバル経済」をテーマに行う。

⑤人間関係学

事務局：「現代の人間関係を再生する」をテーマに、保育園の新たな取り組みや、障がい当事者で、ヘルパーステーションを立ち上げた方などに話題を提供していただきながら、参加者同士が人間関係について考えていくための講座である。

⑥環境

事務局：昨年度は応募の少なかったことを踏まえ、2013年度に引き続き2014年度もエコフェスタに参加する他、フィールドワークと座学を織り交ぜながら、多くの方に参加していただけるよう工夫を重ねていく。

⑦陶芸入門

⑧電動ロクロ

事務局：生涯学習センターで所管している陶芸スタジオを活用して講座を行う。

（意見・質問）

会長：2013年度の環境学は座学のみだったのか。

事務局：エコフェスタには参加したが、大半が座学であった。

会長：前年の総合評価がDとなっているが、これは応募人数が少なかったためか。

事務局：その通りである。

会長：市民大学は好感のもてる講座が多く、結果が芳しくなくても続けるべきという意見も過去に出たが、D評価がついたことについては事務局としてどうなのか。

副会長：2014年度はフィールドワークを多く取り入れたということで、それがどのように成果に生きていくかがポイントとなる。

委員：前年でD評価がついたものを今年度も引き続き行うというのは、例え反省点を踏まえて改善したとしても何か問題があるのではないか。

会長：評価がDになったのは、募集定員にたいして応募者数が少なかったのが大きな原因であり、過去の運営協議会において、応募者数が減少したとしても必要な講座であれば、改善しながら続けていくという意思決定がすでになされている。D評価としたが、アルファベット表記だけでは詳細がわかりづらいため、評価のつけ方についても今後検討していく必要がある。

委員：参加者数の問題もあり、テーマも少し偏ったイメージがあったため、もう少しテーマを広げるか、または募集定員や回数を減らす等、規模の縮小をすべきではと考えていた。しかし今回のテーマを見て、これまでよりも魅力を感じたので、人数が集まるのではないかという期待もある。人数が集まらなかったために講座自体を廃止してしまうという方法もあるかもしれないが、重要なものは重要であるということで、改善を加えながら継続することもまた必要なのではないか。

（2）ことぶき大学後期講座

①くらし

事務局：昨年度は通年講座で文学や歴史、美術の講座を主に行っており、大変人気もあったが、後期はくらし・生活について、高齢期をどう過ごしていくかを考える機会を生涯学習センターから話題提供していく。

②音楽

事務局：前期で伝統文化についての講座を行い、それと対となるようなかたちで音楽の講座を行う。

③健康

事務局：健康については前期も講座を行ったが、後期はリフレッシュダンス&ストレッチをテーマに進めていく。

（意見・質問）

委員：テーマに歌とコーラスとあるが、各市民センターや地域センターにはコーラスグループが多数あるため、それらとの差別化を是非考えていただきたい。

事務局：サークル活動との違いについて、ことぶき大学は社会教育の事業として、高齢者を対象に行っている。ことぶき大学がもとで活動を始めたサークルもあり、個人で参加できるため、その後の地域の仲間づくりに繋がっている。

委員：高齢化社会の中で、ことぶき大学の人気はどんどん上がっていくと考えられる。そのニーズを今後うまく捉えながら事業を行っていただきたい。

委員：犯罪や災害の被害者になるのは高齢者が多いということもあるため、防犯・防災についての講座も行っていただきたい。また、ことぶき大学というネーミングに少し違和感がある。

会長：ことぶき大学というのは全国で共通した言葉なのか。

事務局：各自治体によって様々である。名称の変更は可能なので、運営協議会のなかで議論いただければと思う。

(3) コンサート事業

①敬老の日みんなで歌おうファミリーコンサート

事務局：敬老の日の前日、9月14日に行う、家族みんなで歌えるような参加型の公演となっている。

(意見・質問)

委員：家族連れが対象とあるが、複数名以上での受付なのか。

事務局：個人でも申込可能であり、1度に4名まで受け付けている。

②世代を超えて夢を語ろう ～対談とライブ～

事務局：町田市出身で、市のシティーセールス隊も努める6人組ロックバンド「Brand New Vibe」による対談とライブであり、対談では生涯学習コーディネーターの会にご協力をいただく。

昨年度2月に計画していたが、大雪により中止になったことから9月の実施となった。

(意見・質問)

委員：世代間交流とはどのように行うのか。

事務局：Brand New Vibeは全員が20代で構成しており、市内の小川高校軽音楽部のメンバーが数年前の成人式で再会したことがきっかけでバンドを結成した。下積み時代の苦労話等を交えながら、現代の若者が頑張る姿についてインタビュアーの方に引き出していただきながら中高年世代と交流していく。2月実施予定の際は48組の応募があり、過半数が50代以上だったものの、10代～30代も3分の1を占めており、若者もセンター利用者を増やしていくことも狙っていききたい。また、Brand New Vibeのほかに、2月に実施を予定していた時は、市内で活躍するオヤジバンドの方たちに出演依頼していたが、今回の9月は都合がつかないとのことで、今回は今井谷戸プラスというバンドに来ていただく。今井谷戸プラスは金管楽器で構成されているバンドで、主に市内の施設訪問をして活動している。

(4) 2014年度家庭教育支援事業

事務局：1年間の家庭教育支援に関する取り組みについて説明させていただく。まず、生涯学習センターで家庭教育支援事業の財源として、国・都の補助金を活用していく。国・都からそれぞれ3分の1ずつ補助を受けている。主旨としては、社会全体での家庭教育支援の仕組みづくりを進めていく事業についての費用の一部を補助するというものである。この補助金を受けるにあたって、東京都家庭教育支援基盤形成事業実施要綱第4の1「運営委員会の設置」というものがあり、各自治体が事業を実施する際は、運営委員会を設置し、第三者の意見を求めながら事業を進めていくことが条件として掲げられている。生涯学習センターでは2013年度からこの補助金を活用していて、この生涯学習センター運営協議会を家庭教育支援運営委員会と兼ねていただいた。今年度についても、前年どおり事業の評価やご意見をいただきながら、事業を進めていきたいと考えている。また、基本的な考え方として、事業を大きく3つに分類している。1つ目は現役の子育て世代への学習の機会・情報の提供で、実施事業として、乳幼児の保護者のための講座から、それぞれの子どもの年代に応じた学習プログラムを提供していく。

2つ目は地域の家庭教育を支える担い手の育成ということで、家庭教育や子育ての経験や技術、様々な知識をお持ちの方に実際に地域で悩んでいる方に対してアプローチをしていただき、

家庭教育に関する学びの輪を広げていくため、人材を育成していきたい。実施事業としては家庭教育支援学級を考えている。

3つ目は担い手の活動支援、ネットワーク形成ということで、市内で様々な家庭教育支援活動をされている団体・グループをネットワーク化し、団体同士の連携を図っていく。ネットワーク化のきっかけになる場として、きしゃポップ、くるくるロケットを考えている。また、家庭教育支援事業の関連図にもあるように、それぞれの事業を単体として捉えるのではなく、学んだことを他の場でも活かしてほしいと考えており、事業間の関連付けを意識しながら実施していきたい。

(意見・質問)

会 長：くるくるロケットはどのように実施しているのか。

事務局：きしゃポップが職員と臨時職員の保育士が中心になって行っているが、もう少し市民が主導になって運営できないかと考え、くるくるロケットでは市民が中心に運営していけるような企画をしている。実行委員会を立ち上げ、そのなかでグループ同士が集まり、話し合いをしながら内容を決めていくことで、グループ間の連携や交流が生まれるのではないかと考えている。

委 員：前年度の変更点で、開催を2つの時期に分けたうち、第2期目は家庭教育支援学級修了生が企画・運営に携わるとあり、これ自体はとても良いことだと思うが、1期目と2期目で余りにも内容に差があると、受け手としては少し不公平な感じを受ける。重複して受けられないものなので、ある程度市が主導して内容のすり合わせをしたほうが良いのではないかと。また、もしこのとおりにやるのであれば、第1回目のときに周知してほしい。

事務局：2期目について、企画をしていただく方々は乳幼児講座を受けたことがあり、ベースとしては実際受講してよかったものを取り入れ、更に自分たちの表現を重ねていくということを想定している。企画の中心を担っていただくが基本的には市民企画講座のように、職員も中に入っていきながら企画を進めていく。

委 員：この事業で育った担い手の方たちの面倒はどの程度までみていただけるのか。保険等の問題もあるので、担い手の方たちの活動を公民館の活動に準ずるものとして扱ってほしい。活動中に事故が起こっても担い手の方だけでは責任を負いきれないので、生涯学習センターだけでなく地域で活動を行うときもバックアップをしてほしい。

事務局：実際に活動される方が感じている課題を、職員が把握しきれていない部分もあるので、まずは担い手と職員が接点を持つところから始めて、情報共有をしていきたい。

(5) 生涯学習センター夏休み子ども週間

事務局：毎年生涯学習センターでは夏休みの時期に子ども向けのイベントを行っており、2013年度までは夏休みの最終日曜日に行っていたが、2014年度は一週間の期間を設ける。子ども向けのイベントは生涯学習センターに限らず、子どもセンター等でも行っているため、庁内で連携をとりながら差別化を図っていきたい。生涯学習センターとしては、子どもたちに学習の機会を提供すると同時に、地域で活動している方々の日頃の活動の成果を発揮する場に繋げることを考えている。学習サークルや相模女子大学の学生、ボランティアバンクに登録していただいている方々を講師に招き、その方たちが日頃培ったものを子どもたちに披露し、地域の方たちと子どもたちの交流の場になるような企画をしていく。

(意見・質問)

委 員：チラシはいつごろできるのか。

事務局：全校生徒分に配布されるリーフレットを児童青少年課で作成し、そこに内容を掲載し、夏休み前には各学校への配布を予定している。

委 員：講座ごとに募集人数は違うのか。

事務局：各講座で人数は違う。分別ゲームは2回実施のうち各30名、町田の昔を知ろうが30名、スクラップブック・手打ちうどん体験はともに親子10組、生命を見る設計図は30名、かると大会は20名、1日2回実施のプラネタリウムは各50名となっている。

(6) (仮) ササッと今夜は浴衣美人！夏の着付け講座

事務局：109との共催事業として2013年度も浴衣の着付け講座を行った。109内の着物を取り扱っている店舗と協力をして、若者をターゲットにした企画である。生涯学習推進計画のなかでも若年層に対する学習機会の充実や、関係機関との連携を掲げており、そこを意識しながら事業を進めていく。着付けだけでなく、浴衣の歴史や作法等の幅広い知識を提供し、日本の伝統文化のひとつとして捉えていただけるような内容を予定している。

(意見・質問)

委員：講座は午前中と昼に行くようだが、タイトルに「今夜」と入っていると夜の講座のような先入観をもってしまわないか。

事務局：タイトルは検討する。

委員：最近では男性の浴衣姿もよく見かけるが、何故女性限定なのか。

事務局：和室がきちんと仕切られておらず、着替えの関係等で調整が難しい。

委員：浴衣は持参するのか。

事務局：レンタルは行わないので持参していただく。

(7) 環境学習「ミヤマ仮面がやってくる」

事務局：環境・自然共生課との共催による子ども向けの環境学習で、元プロレスラーである垣原氏が昆虫のミヤマクワガタを模したミヤマ仮面に変身する。子どもたちにとって身近な存在である昆虫をテーマとしたクイズや体操などの体験型プログラムを提供し、子どもたちが命の多様さを尊ぶ気持ちや自然環境を守る意識の高揚を目的とする。また、事前の周知期間である7月1日から29日に、マイボトルを持参して来館された子どもたちへミヤマ仮面マイボトルステッカーを配布することで、イベントのPRとともにごみ減量の大切さを伝える。

(意見・質問)

委員：1時間は短いのではないか。

事務局：2012年度、2013年度も1時間の時間設定で好評だったので、時間は変更せず様子を見る。

委員：ステッカー配布は当日の予約を兼ねるのではなく、単純に配布するだけなのか。

事務局：予約は兼ねていない。当日も配布する予定である。

委員：当日はクワガタやカブトムシを展示してはどうか。

事務局：協議はするが、展示が難しいようであれば昆虫の紹介だけでも考えたい。

2、事業評価について

(1) 第9回まちだフレッシュコンサート

事務局：町田市内の大学を卒業したばかりの方たちにコンサートをしていただいた。イベントダイヤルでの募集時は定員に満たなかったが、その後の申込で当日はほぼ満席になった。各演奏曲の紹介を出演者の方にさせていただいたり、最後は出演者全員がステージに立ちカーテンコールをしたりと、まとまりのあるコンサートとなった。

(2) 雑学大学共催講座「伊賀健一講演会」

事務局・雑学大学との共催で、町田名誉市民でもある伊賀健一氏に、所属する町田フィル・バロック合奏団の演奏と、講演をしていただいた。コントラバスについて詳しく説明していただき、非常に難しい内容だったが、優しい雰囲気でお話いただいたので、参加者からは好評だった。共催のあり方について課題がある。今後改善していきたい。

(意見・質問)

なし。

<報告事項>

1、事業評価の最終報告

事務局：「多摩丘陵の自然入門」は、2012年度と2013年度と応募者数、受講率の状況から通年講座以外のスタイル、手法を検討していきたい。

「エコとくらしの未来講座」は、受講率が2012年度28%、2013年度18%と大変低い。課題としては必要であると思われるので、今後継続していくために、講座の目的に立ち返り、事業プロセスを見直したい。

「まちだの福祉」は、今年度から新たにプログラムを組みなおして行った講座であるが、修了者グループが立ち上がるなど、成果がみられる。今後もいろいろな切り口で福祉を捉えた講座づくりや、いろいろな知識を周りの人々と共有できるような仕組みづくりを工夫しながら実施していきたい。

「まちだ市民国際学講座」は、いろいろな世代の市民に学んでいただきたい講座である。開催日、開催時間等、いろいろ試みる必要がある。また、講座プログラム編成時に講座の目的を明確化し、今度も実施していきたい。

市民大学「町田の郷土史Ⅱ」は、実施目的は明確であると思われるが、もうひとつ踏み込んで、受講後の活動へ繋げる仕組みづくりも視野に入れた講座づくりを考えていきたい。

「こころとからだの健康学」は、健康については市民の関心が高い課題であるが、社会的課題に結びつくよりも、個人的な課題になりやすいので、「健康の伝道師」なども含め、地域での健康づくりに繋げる仕組みづくりを他部署とも連携をとりながら進めていきたい。

人間学後期「現代人間事情」は、2012年度、2013年度とも応募者数が少ないことが課題となっている。目的、プログラム、手法等の見直しを行っていきたい。

市民大学後期「陶芸入門講座」は、縄文土器の作製なども含め、前期陶芸入門講座よりも町田の特長ある陶芸講座であるが、ここ2～3年応募者数の減少が目立つ。今後、他の講座や他部署との更なる連携を含め、講座の見直しを考える必要がある。

市民大学後期「電動ロクロ体験講座」は、施設、窯、電動ロクロの数等に利用制限がある。コスト面でも、費用対効果としての講座のあり方も考え直す時期に来ている。今後、施設の活用も含め、講座の見直しを考える必要がある。

「学生活動報告会」は、若年層が講座に携わることで、いろいろな効果が期待できる。社会的課題としても必要なテーマであることから、継続していきたい。

委員：評価がアルファベット表記だけではわかりづらい。例えばD評価は縮小とあるが、事業自体を縮小するのか、募集人数等を縮小するのかで、次回実施するかどうかが決まるのではないかと。Dという評価を見ただけでは、また来年度もD評価なのに実施するのかという話になってしまう。評価はアルファベットではなく、「妥当である」等の文章のほうがよいのではないかと。

委員：事業評価シートの様式を作成した当時、職員と委員が意見を出し合いこの様式になったが、やってみないとわからないので、実際に使用しながら定期的に見直すという方向になった。様式作成から数年が経過したので、見直しの時期にきているのではないかと。

会長：評価のしかたについては、市役所の組織内で問われないのか。

事務局：市全体としては、「部長の仕事目標」、その下に「課の仕事目標」があり、達成水準を設定し、目標をどこまで達成できたかをA B C Dで評価して報告するものはある。しかしこの事業評価シートはそれらとは別のもので、それぞれの事業について第三者評価として委員の方々にご意見をいただき、管理職が総合評価をするものである。あくまで過程として作成しているもので、このシートが完成形ではない。

2、センター長報告

6月議会が開会された。生涯学習部は予算、条例等の議案は特に無く、行政報告では木曾山崎図書館の耐震補強工事に伴う臨時休館についての報告を行った。また、一般質問についても、生涯学習部所管の質問は出なかった。

3、東京都公民館連絡協議会の活動について

委員：7月19日土曜日の午後に東京都公民館連絡協議会委員会第1回研修会が行われる。テーマは「公民館の活性化～公民館まつりを考える～」、講師は上田幸夫氏で、対象は各公民館運営審議会委員（町田市では生涯学習センター運営協議会委員）、職員、市民等となっている。また、テーマをこのように決めた背景は、2014年度委員会での年間テーマが公民館活性化に

ついて大きく捉え、そのひとつとして第1回目は公民館または生涯学習センターまつりについて参加者全員で検討することになった。前回の5月28日委員部会では、各市からチラシを持ち寄り、状況報告をしていただきそのなかで共通点や問題・課題点をピックアップしていった。みえてきた共通点としては、各市で利用者団体が主導となって実行委員会が行われている傾向があった。また、参加者が高齢化しているため、若い力を取り入れるという課題、マンネリ化している、来館者を増やしたい、情報発信をどうするかという意見もあり、今後の話し合いの中で解決策を見出していきたい。町田市においても様々な課題があると思うので、この機会に委員の皆様にもご参加いただき、各市の状況も参考にさせていただきたい。

4、2013年度町田市社会教育関係事業講師派遣の実績について

事務局：第2回の運営協議会で講師派遣事業についてお話をいただいた際、2013年度の実績を示してほしいとのご意見をいただいたので、資料としてお示しした。

(意見・質問)

委員：募集の際、自分の団体の会員だけでなく、それ以外の方たちにも周知していくという意味で会員外という欄があるのだと思うが、1、2名程度の少人数で申請してはいけないのか。

事務局：会員外の参加者が少ないのは殆どがPTA主催のものとなっている。要綱の範囲内であれば、参加するにあたって特に制限はない。

委員：太極拳やストレッチ等は趣味の範囲のように感じるが、審査はされているのか。(佐合委員)

事務局：学習的要素があるかどうかを聞いたうえで受けている。

<審議事項>

1、今後の運営について

会長：これまでは個々の事業評価ばかりに時間がかかっており、事業全体のあり方について考えていかなければならないということで、生涯学習推進計画の項目の中で、それぞれの事業がどのようなライフステージに含まれているかをたたき台として資料にまとめた。

事務局：教育プランのアクションプランである生涯学習推進計画の中にも掲げているツリー状のもの、実際に行う事業を、事業群として対象年齢毎に当てはめている。実際はもう少し対象年齢に幅があると考えられるが、たたき台としてお示ししたので、参考にさせていただきたい。

委員：生涯学習センターとして行っている事業がどのようなものかを考えると、町田の生涯学習がこれから何を目指していくのかを考えなければいけない。例えば啓発的な事業なのか、趣味や仲間作りのための事業なのか、それとも市民が主体となって生涯学習をつくっていくような、市民力を育てる事業なのかを明確化する必要がある、

会長：生涯学習の理念とは何かということから議論していくべきではないか。

委員：生涯学習審議会でも今後の運営について検討したが、人材育成のためにはPDCAサイクルの一步先へ踏み込む必要があるということ、また、まずはビジョンを共有し、どのようなイメージを設定するか、最終的にはその経過をプレゼンテーションしていくという意見があがった。

委員：理念については今後は是非議論していく必要があると思うが、今回は時間もないために、如何にして事業評価の時間を短縮するかを考えたい。例えば事業ごとに部会をつくり、その部会の中で検討し、意見を集約する等の事前活動ができれば当日の時間が短縮できる。

会長：事務局との事前打ち合わせの中でもそのような案は出た。これまで事業評価シートは、自己評価、運営協議会委員からの外部評価、最後に総合評価としてセンター長評価を行ってきた。外部評価については、運営協議会としての評価ではなく、運営協議会としての立場を背負いながら、委員個人での評価でよいのではないか。

委員：生涯学習センターとして、何を協議してほしいか、課題を明確にしないと議論できない。

委員：運営協議会では事業評価はもちろん、その上に、皆で集まって学習をして地域づくりに役立てようという大きな目標がある。運営協議会としては個々の事業を評価しながら、その外側の、事業評価シートでは網羅できない課題について考えていくべきである、

会長：教育プランが策定されて5年経過し、アクションプランである生涯学習推進計画が策定された。我々はそれを受けて、計画がこれでいいのか討議を行いながら改善していくべきである。根本的なところでは、学校教育も含めた生涯教育を目指そうという目標があるが、なかなか突破で

きない現状がある。これまで生涯教育といいながらも利用者が高齢化していることから、幅広い年代を対象にできないかというところで、ライフステージ別に事業を一覧表にさせていただいた。ここから改めて課題を発見し、議論を進めていく。

委員：委員の皆さんも様々な立場で課題を抱えていると思うので、職員だけでなく委員側からも課題や解決策を提案していくべきである。

会長：職員側でも、実際実務に携わっている身として、課題や改善すべき点を出してほしい。

副会長：運営協議会と審議会は役割が違う。運営協議会のなかで我々ができることはどこまでの範囲かという意識をきちんとしたうえで、生涯学習センターが行っている事業が市民や地域のなかで、どのように活かされていくのかを考えていくべきではないか。

事務局：基本的には生涯学習センターが実施する生涯学習事業について協議していただくのが生涯学習センター運営協議会であるが、生涯学習や社会教育の理念は必ず必要になってくるので、その点は大いに議論していただき、事業をよりよいものにしていくためにご協力いただきたい。

委員：事務局と委員双方が意見を持ち寄り、問題意識を共通認識する場が必要である。

委員：その議論の場をつくるために、まずは事業評価をどう行っていくかを決めるのが先ではないか。

会長：事業評価の方法としては、今後は運営協議会のなかで議論するのではなく、運営協議会委員の意見として、委員それぞれが個々の事業について評価していただくこととしたい。

副会長：先ほど話題に出たが、総合評価をアルファベット表記ではなく、文章にしてはどうか。

事務局：今後検討させていただきたい。

会長：次回は運営協議会の立場として、事務局と委員双方で個人個人が課題を持ち寄っていただきたい。

事務局：立場上職員個人としての意見は組織上の意見と捉えられてしまうため、難しい。

会長：委員も事務局も同じ権利を持っているものとして意見を出してほしい。

委員：生涯学習センター運営協議会設置要綱に立ち戻り、その範囲内で会議を進めるべきであると考え。意見交換することは良いことだと思うが、事務局が個人個人で意見を出すというのは無理があるのではないか。

委員：事務局としてではなく、現場の本音として出してほしい。

委員：まずは委員側から第三者として課題を提案し、そこから現場の声を聞く形式にしたほうがよいのではないか。

会長：次回以降、事業評価についての時間は1時間とし、担当の委員の方には次回開催までに意見を記入しておいていただく。残りの1時間については、それぞれの立場として感じている課題を持ち寄り、議論していきたい。

<その他>

特になし。